

# 嵐牛 友の会便り

第十二号

2018.1.7発行

〒436-0004

掛川市八坂434-1

嵐牛俳諧資料館

伊藤鋼一郎

携帯番号

090-1472-2972

Eメールアドレス

takumise@

titan.ocn.ne.jp

## 目次

- [1]新年あけましておめでとうございます  
伊藤鋼一郎
- [2]嵐牛発句集二六頁「古戦場」によせて  
岡本春一
- [3]増田嘉伸氏ご所蔵の石川依平詠草について  
高松亮太
- [4]柿園友垣抄(十二)  
倉島利仁
- [5]講読・鑑賞の会  
今後の予定
- [6]嵐牛俳諧資料館近影

新年あけましておめでとうございます

伊藤鋼一郎

新春を迎え皆様ご健勝の事とお喜び申し上げます。本年も嵐牛俳諧資料館、友の会を宜しく願います。

一日づ、立やたしかに三ヶ日 嵐牛『そのまま集 四編』

昨年の友の会の活動は、皆さまの協力をいただき、予定通り五行う事が出来ました。誠に有難うございました。最近の「友の会」では嵐牛作品の講読・鑑賞に話が盛り上がり、時には脱線も交えつつ、楽しく有意義な時間を共有できました。その余韻として、会員の岡本春一さんからご文章を寄せて戴きました。是非、「友の会便り」に掲載してくださいという顧問・加藤先生のご推奨と付加のご意見を戴きましたので、嵐牛の『そのまま集』ではありますませんが、お二人の文章をそのまま掲載させていただきます。

懸案の『嵐牛俳諧資料集』については初校の最終段階に入っているとのこと、加藤先生、倉島さんに於かれましては宜しく願います。また、加藤先生からは、次なる懸案、一般読者向けの評伝書の具体的な企画案も頂戴しています。ともに宜しく願います。(「嵐牛・友の会」会長)

嵐牛発句集二六頁「古戦場」によせて

岡本春一

地元の事象に精通していた、伊藤嵐牛さんが題した「古戦場」は、戦国時代地方の戦いとして、小夜中山・海老名砦の戦いを指し、第一回中先代の乱(建武二年(二三三)、第二回観応の擾乱(正平六年(二三三)、第三回応仁の乱(四七五)の三回、大井川を境に、駿河と遠江に分かれ配下の武将が戦闘を繰り返し、多数の戦死傷者を出しました。鎧塚を始め、こうした供養塔である一石五輪塔が海老名砦周辺に沢山あり、茶園の開拓時に集積した一石五輪塔が

山と積まれた塚があります。此処で取り上げたのは、第二回観応の擾乱時を念頭に置いたものと思われれます。ほととぎす

うら切のむかしのすぢを蜀魂

足利尊氏は弟の直義に対し殊の外面倒見が良く、一時は室町幕府の実権まで握らせましたが、観応の擾乱で謀反を計り、尊氏を裏切ったので追討します。尊氏は掛川に陣を構え、小夜中山で合戦になります。伊達方城主伊達経殿助も地元の利を生かして天王社に戦勝祈願をして出陣します。見事勝利したことに依って山口御厨領である本所(村)を半済令に依って半分頂き、伊達方村が誕生します。

従って、「裏切の筋」は、尊氏が信頼して弟直義に幕府の実権まで握らせられたにも関わらず、裏切って尊氏の首を狙うとは何たる恥知らずだという怒りと、「蜀魂(ホトトギス)」は自分で菓を作らず、ウグイスなどの他鳥の菓に卵を産み付け、抱卵させ更に首離まで他鳥に任せるといふ恩知らずの鳥だから、結句を「蜀魂」に充て完成したものだと思われれますが、如何でしょうか。(「嵐牛・友の会」会員)

「付」顧問・加藤定彦コメント

没後に門人たちが整理した『嵐牛発句集二編』には、  
古戦場

○はけしきの横矢のこく郭公(朱で抹消)

○裏切のむかしの筋を不如帰

と二句並べて記し、一句だけを版本に採択しています。

嵐牛は前書きを「古戦場」として、広く古戦場を前提として詠み、鑑賞できるように配慮したのだと判断されます。もちろん身近な史跡として、岡本さんご指摘の古戦場があつて、そこで詠んだ可能性は高いと思います。したがって、創作の契機となった古戦場を特定できるが、鑑賞する場合は特定しない方がよい、ということになるかと存じます。

また、ご指摘の史実についての参考文献を挙げて頂ければ、より詳しい事情が了解でき、親切かと存じます。

増田嘉伸氏ご所蔵の石川依平詠草について

高松 亮太

平成二十九年十一月二十六日(日)に行われた前回の嵐牛友の会において、増田嘉伸氏が私蔵されている石川依平の詠草二枚をご持参くださった。本稿ではそれらの資料の翻刻を行い、簡単な解説をしておきたい。なお、翻刻は増田氏ご自身が行ったものを高松が補訂したもので、その功の殆どが増田氏にあることを予め断っておく。翻刻に当たっては、通行の字体に統一し、濁点・句読点等を私に附した。また、見せ消ちは保存せず、全て修正後の本文を掲げた。

・石川依平詠草①

青々翁の七回忌のわざし給ふとき、て、十年あまりさきにあひてか  
たらひしことなど思ひ出てよめる 依平  
てりわたる菅生の野べの月  
影や露にとゞめしかたみな  
るらむ

右の歌は、詞書によって「青々翁」(鶴田卓池)の七回忌、すなわち卓池が没した弘化三年(一八四六)の六年後である嘉永五年(一八五二)に詠まれた歌ということになる。卓池は言わずと知れた岡崎俳壇の中心人物で、嵐牛の俳諧の師も他ならぬこの卓池であった。詞書によれば嵐牛の和学上の師でもあった依平は、この卓池と十数年前に対面しているというが、稿本『柳園詠藻』に両者の交流を示す記事は見当たらず、依平側の資料からは両者の対面は確認できない。ちなみに、右の歌も稿本『柳園詠藻』には未載。内容は、卓池の故郷である岡崎の菅生を詠み込みつつ、草葉の露に宿る月の光が故人を偲ぶよすがであるうと詠む。

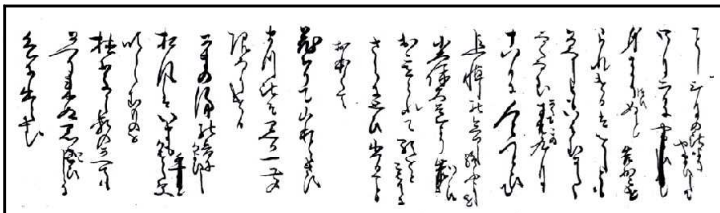
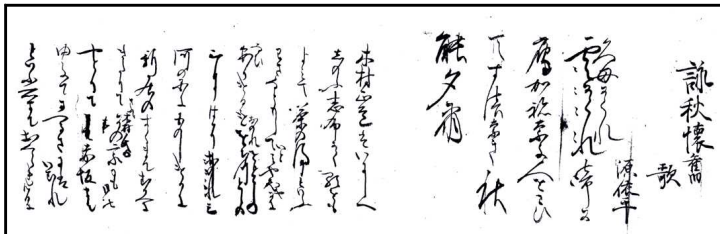


・石川依平詠草②

詠秋懷旧歌 源依平

くもがくれ啼か雁がねなき人をこひてすべなき秋の夕蕭  
木村正道はいにしへのぶ志ふかく、歌をもよみて茶の湯といふわ  
ぎなどもして、いとみやびやかなむありける。おのれをちつとしの  
三月ばかり、三河の国にもものしけるに、新居のすくまでむかへにき  
たりて、さて木村氏のかの家にも日比やどりて、赤坂までゆきてか  
へるさには、いむれといふ所までおくられけるに、ことし三月の比  
よりやまひして、四月二日に身まかり給ひぬと告おこせられけるは、  
をしともかなしともいはむかたなくなむ。かくてこの九月十八日に  
人々つどひて追悼の会し給ふよしを、小久保久道よりいひおこせら  
れて、歌をとこはる、に、さらに思ひ出ることもおほくて、  
花ちりて山ほと、ぎすまつ比は君が一声限なりける  
かまの湯の音にかよひし松風はいまもかはらず吹らむものを  
植おきし郊のかへでもかへり来ぬ君こひしらる色に出らむ

本資料は、和歌や茶道に造詣の深かった文人で、同じ年の四月二日に没した木村猪左衛門正道の追悼歌会のために詠んだ歌群である。木村正道の素姓は不明ながら、息子と思しき木村猪左衛門正樹が、羽田野敬雄の紹介で天保十三年(一八四二)に平田篤胤に入門していることから、詞書に「いにしへのぶ志ふかく」とあるように古学を能くした人物であり、正樹は正道の影響もあって、篤胤に入門することになったのであろう。詞書によれば、二年前に依平が三河に出かけた折に、三河滞在中に何れとなく世話をしてくれた人物であったようだが、三月頃から病に伏し、四月二日に没したという。「をしともかなしともいはむかたなくなむ」という筆舌に尽しがたい悲嘆は、両者の生前の親交を忍ばせるものである。(嵐牛・友の会)幹事補佐)



柿園友垣抄(十二)

倉島利仁

嵐牛四天王の一人である鈴木貫一の子孫、鈴木健治氏ご所蔵の資料から、嵐牛とその仲間たちの交歓の様子が伺われる資料を紹介する。それは、表紙を  
含め六枚の紙を仮綴じした写本で、表紙に「たけがり記／安政六末年(二八五九)」  
とある。以下に全文を示す。

彼高田にはあらぬ、我長嶽山のかきだつみねわけてんやと、虚庵大徳のお  
とづれうれしく、其わたりの誰かれそ、のかしあひて、いざとうちつどひ  
たるは、きく月廿一日也。

入ぐちに近き香や菌山

嵐牛

吹あげる風に添香や菌山

知碩

茸狩や智恵だていふと笑はる、

柳翫

集りて見るや木の子の生しさま

三牛

こゝろから先へす、むや菌狩

桃寿

稚も跡追をして菌とり

燕居

茸狩や大丈夫なる朝日和

岳丈

とれもせで笑はれがちや菌狩

初白

あるものに見附てうれし菌狩

椿谷

たけがりや松に吹するぬれ羽をり

四山

嬉しげに見せつ菌のとりはじめ

虚庵

ひとさかり土も香の有木の子山

、

取て置うちにも聞く菌かな

貫一

松茸や誨て来た跡にある

、

茸がりや香に迷ふては越る尾根

、

ひと峠先にも声や木の子とり

、

撰出した板間も匂ふ木の子哉

、

ありさうな松の黒みや菌代

、

見覚えの代はなれて菌哉

、

木の子狩友呼声か山彦か

、

たけがりや逆なる道の行もどり

、

たけ狩のだん／＼ちさき手がら哉

、

案内にさがさせてとる木の子哉

、

一日に篠ふみ別て木の子がり

嵐牛

いぐちいとつとさへとり得て

香に一日延れ歩行や木の子山

、

どちらから吹ても茸のかをり哉

静嘉

文章冒頭にある「高円」は、大和国(奈良県)春日山南方に続く山で、『万葉

集』では秋の景物とともに多く詠まれた歌枕である。ここでは、『万葉集』巻十

秋雑歌「高松のこの峯も狭に笠立てて盈ち盛りたる秋の香のよさ」(高円山の頂

は狭いものの、茸が笠を立てて一面に溢れている秋の香りのみごとなことだ)

を踏まえ、『万葉集』に詠まれたあの「高円」ではないが、我が長嶽山龍葉院の

茸が笠を立てている峰に分け入りませんかという、龍葉院住職虚庵の手紙も嬉

しく、近辺の知人友人を誘い合って「さあ」と集まったのは、九月二十一日の

ことだった。龍葉院は、鈴木家の北西約一・六キロにある曹洞宗の古刹である。

集まった十三人のうち、知碩と貫一、貫一子息の椿谷、龍葉院住職の虚庵の

他、「柿園門人録」に名が見られるのは、桃寿(山名郡諸井村、戸塚銀兵衛)、

岳丈(山名郡岡山村、今城今七(石黒十郎平とも)、静嘉(山名郡東脇村、山

下保次郎)、柳翫(城東郡横須賀、小野長次郎)、燕居(山名郡戸羽野村、金原

弥市郎)の五人で、いずれも安政四く七年に入門している。また、三牛と四山

は柿園評月並句合への参加が認められ、三牛は掛川市土方の住。『元治二年(二八

五)柿園日記』二月十四日に「欠川四山来」、翌十五日には「掛川四山催会に行。

途中、岳丈・貫一にあひて、夕方帰庵。両子とまる」とあり、掛川住の四山と

彼らの親交の様子が窺われる。一方、嵐牛門下の年次発句集『そのまま集』に

は、柳翫と初白以外の十一人が入集している。柳翫の名が見られない理由は分

からないが、初白は貫一の「俳弟名前覚」の中に「三秋軒初白 上西シマ菟蔵」

とあり、貫一の門人であることが分かる。

安政六年九月二十一日、嵐牛は親交のあった龍葉院住職虚庵に招かれ、浅羽

から岡崎、横須賀辺りに住む仲間が集って茸狩りを催し、親しく発句を詠み合

った。その発句からは、茸に薫る山を褒め称え、皆で智恵を出し合い、心はや

りながらもなかなか見つけられず、あるいは見つけたときの喜びなど、尾根を

越え、峠を過ぎつつ、一日中茸狩りに興じた様が想像される。また、彼らは嵐

牛「香に一日」を発句とする半歌仙も残している。龍葉院の裏には、嵐牛たちが

茸狩りに興じた山が今も残っている。ご住職のお話によると、かつてこの山

では松茸がたくさん採れたそうである。

(「嵐牛・友の会」幹事補佐)

講読・鑑賞の会 今後の予定

第十五回 一月二十一日(日)

会場 嵐牛俳諧資料館和室 八畳十六畳  
時間 午後一時三十分～四時三十分  
内容 石川依平「宇津の山越」講読  
「嵐牛発句集」講読 ほか

第十六回 四月十五日(日)

会場 嵐牛俳諧資料館和室 八畳十六畳  
時間 午後一時三十分～四時三十分  
内容 石川依平「宇津の山越」講読  
「嵐牛発句集」講読 ほか

※ 友の会に対するご要望などをお聞かせください  
また、友の会会員の方、その他嵐牛繋がりで面白いこと  
がありましたらご投稿ください。



元旦の穏やかな日差しを浴びる嵐牛俳諧資料館  
名称と共に 新たな気持ちでのスタートです

平成三〇年一月一日 撮影

事務局 伊藤英子